OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	フランスのアール・ヌーヴォー建築に見るアーツ&クラフツの影響 : M. P -ヴェルヌイユの館とパリ女子電話交換手寮の例をもとに
Author(s)	廣瀬, 緑
Citation	デザイン理論. 2019, 74, p. 35-50
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/75316
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

フランスのアール・ヌーヴォー建築に見るアーツ & クラフツの影響

── M. P – ヴェルヌイユの館とパリ女子電話交換手寮の例をもとに ──

廣瀬　緑

キーワード
アーツ & クラフツ，アール・ヌーヴォー，M.P- ヴェルヌイユ，『アール・エ・デコラシオン』，ラール・ドン・トゥ（工芸家グループ）
Arts & Crafts, Art nouveau, M.P-VERNEUIL, *Art et décoration*, L'art dans tout

はじめに
1. アーツ & クラフツのフランスへの伝播
　1.1. 雑誌，記事におけるアーツ & クラフツの紹介
　1.2. アーツ & クラフツを実際に見る機会
2. ヴェルヌイユ設計の館
3. ブリオーBLIAULT によるパリ女子電話交換手の寮
おわりに

はじめに

フランスにおけるアーツ & クラフツの伝播にはいくつかの経路がある。家具や工芸作品は1896 年頃からパリの美術商ビング（S.Bing）の店を介して販売されていた。メディアを通しては，フランスの美術工芸雑誌『アール・エ・デコラシオン』« *Art et décoration* » の中でデザイナー，モーリス・ピラール・ヴェルヌイユ（M.P-VERNEUIL/1869–1942）[1] が積極的にアーツ & クラフツについて執筆，紹介していた。他に展覧会や芸術家の交流という経路もあったが，特に前二者の活動はフランスの工芸家に色々な意味で刺激を与えたと考えられる。ヴェルヌイユはアール・ヌーヴォーの指導者ウジェーンヌ・グラッセ（Eugène GRASSET/1845–1917）の弟子として，デザイン理論と方法に関する書物を単行本で 23 冊出版，論文を118 件発表し，アール・ヌーヴォーの普及に努めた人である。彼は 1896 年にアンリ・ヴァン・ド・ヴェルド（Henry VAN DE VELDE/1863–1957）の自宅を初めて訪れてから，建築にも関心を持つようになっていた。ヴェルヌイユが自ら設計した館がパリ郊外にあることは『アール・エ・デコラシオン』の記述から分かっていたが，最近その詳細を調べることができた。正にアーツ & クラフツ様式の家で 1910 年から 1914 年の間住んでいたものである。また，これとは別の例として本稿で二つ目に取り上げるのは，1905 年建築家ブリオーBLIAULT

本稿は，第 60 回大会（2018 年 8 月 9 日，同志社大学）での発表にもとづく。

によって設計されたパリの女子電話交換手寮である。こちらも現存しており，外観と内装はむしろ簡素なアール・ヌーヴォー様式となっているが，労働者のために心地よい住まいを作ることを念頭に社会福祉的な要素が基となって造られた例の一つとして，ウィリアム・モリスの思想に影響の源を垣間見ることができる。まずは，雑誌『アール・エ・デコラシオン』の中でどのようなアーツ & クラフツの建築が当時のフランスで紹介され，何が評価されたのか，そしてヴェルヌイユが自ら設計した館とブリオーの女子電話交換手の寮を紹介しながら，快適な室内と建築を求める動きが現れ始めていた当時のフランスのアール・ヌーヴォーについて考察してみたいと思う。

1. アーツ & クラフツのフランスへの伝播

1.1. 雑誌，記事におけるアーツ & クラフツの紹介

1894 年に雑誌『ラ・ルヴュー・オンシクロペディー』« *La revue encyclopédie* » に 10 ページにわたって詩人でサンボリストのジャン・ラオー（Jean LAHOR/1840–1909）[2] が「ウィリアム・モリスと英国の装飾工芸」[3] と題して，多くの写真付きでアーツ & クラフツをフランスに紹介している（図 1，図 2）。

L'ENCYCLOPÉDIE. – 15 Août 1894.

LITTÉRATURE BEAUX-ARTS

BEAUX-ARTS

M. William Morris et l'Art décoratif en Angleterre.

William Morris

図 1：« M.William Morris et l'Art décoratif en Angleterre », in *La revue encyclopédie*, 1894.

Salle à manger. (Stanmore Hall.) Décoration de W. Morris and Cº.

図 2：同上（図版の一部）

今のところ，この記事は当時のフランスのメディアにアーツ & クラフツが取り上げられた最も早い例ではないかと考えられる。それによると 1850 年頃は，まだ英国でもこの運動は広がっていなかったが，現在（1894 年）は，特に家具，室内装飾，建築において英国はフランスを抜いていると述べている。フランスでも『ザ・ステューディオ』« *The Studio* » のような美術工芸雑誌を作るべきだと提案し，フランスは未だ新古典主義，ナポレオン 3 世様式が

建築の主流であり，新しい要素は見当たらないと述べ，それに反して英国は病院，学校，教会など，特に公共建築にモダンスタイルがよく反映していること，工芸改革の意識が高まっていて，グループで仕事をしている点を評価している。また，思想の伝播としては，当時フランス語にも翻訳されていたアメリカの社会主義作家エドワード・ベラミー（Edward BELLAMY/1850–1898）の小説，「顧みれば」*Looking Backward*（1888）の中に何カ所もモリスのユートピア思想が見られることを指摘している。ベラミーは以前からモリスの考えを知っていて著書も読んでいたものに違いないと考えており，その思想というのはモリスの書物「ユートピアだより」*News from Nowhere*（1890）の中で読むことができると紹介している。

その 2 年後，1896 年には雑誌『ラ・ヌーヴェル・ルヴュー』« *La nouvelle revue* »[4] の中で，美術批評家のカミーユ・モークレール（Camille MAUCLAIR/1872–1945）[5] がビングの店では当初日本の美術品を扱っていたものが次第にブリュッセル，ロンドンの品物も展示されるようになっていると記している。しかしモークレールは 1897 年の工芸雑誌『ルヴュー・デ・ザール・デコラティフ』« *Revue des arts décoratif* » においては，フランスの工芸はフランスらしい物を作るべきであって，他の国のスタイルを模倣すべきではない。特にロンドンのような天気の陰鬱な所で作られた面白くもない工芸品を手本にする必要はないと批判的に述べている [6]。当時，まだアーツ & クラフツはフランスではそれほど一般に広がっていなかったこと，そして政治的な時勢も考慮しての意見と考えられるが，19 世紀末期から 20 世紀初頭にかけての 10 年間は，政治的にもイギリスとフランスはアフリカ分割を巡って対立していた。翌 1898 年のファショダ事件を境に対立が終わり，1904 年の英仏協商の締結に至ってからは次第に親善関係に入り，フランスにおいてもイギリスの工芸品の紹介がはばかることなくできる環境が作られるようになっていた。万国博覧会を通じて紹介されたアーツ & クラフツの工芸品は，この頃からフランスにも次第に入って来たものと考えられる。

雑誌『ザ・ステューディオ』を手本に，フランスでも 1897 年グラッセやヴェルヌイユらが編集者となって美術工芸雑誌『アール・エ・デコラシオン』，1898 年『アール・デコラティフ』« *Art décoratif* » が創刊され，早速アーツ & クラフツが紹介される。同 1898 年には，フランス人美術評論家のガブリエル・ムレ（Gabriel MOUREY/1865–1943）[7] が『ザ・ステューディオ』の通信記者として記事を担当し，英仏双方に工芸美術の傾向を伝える橋渡しの役目をするようになっていた。1927 年，岡倉天心の「茶の本」を英語からフランス語に翻訳したのもムレであり，英語を介してフランスに異なる美術文化をもたらした功績は大きい。

1.2. アーツ & クラフツを実際に見る機会

アーツ & クラフツの実作品の販売については，現存するビングの店の写真から当時の様子

を判断することができる。図 3 は 1898 年の『アール・エ・デコラシオン』の創刊号で紹介された写真である。この部屋の壁には木版画家のプロスペール・アルフォンス・イザック（Prosper-Alphonse ISAAC /1858–1924）[8] による日本風草花のパネルがはめられているが，部屋はアーツ & クラフツの家具で埋め尽くされている。手前のピアノ用の丸椅子はリバティー，四角のテーブルはエドアール・コロンナ（Édouard COLONNA/1862–1948）[9]，一番奥の部屋にある椅子はジョン・ソリー・ヘンリー（John Sollie Henry）[10] 社のものである。図 4 はドイツの美術雑誌『デコラティブ・クンスト』« *Dekorative Kunst* » に掲載されたもので，1898 年のビングの店の様子である。初めはヴァン・ド・ヴェルドの作品で構成されていた部屋であったが，やはりイギリス製品を中心とした食堂の展示に取り代わっている。睡蓮模様の食卓椅子，左奥のベンソン & ビゴ（Benson et Bigot）[11] 社の花台，床にはフランク・ブラングウィン（Frank BRANGWYN/1867–1956）[12] の葡萄模様のカーペットが敷かれている。ビングの商品記録帳 Album de référence[13] によると，家具以外にも銅，真鍮製の水差しやランプ有線七宝の皿なども扱われた。家具は価格的にも手頃で椅子は大体 50–80 フラン，当時のアール・ヌーヴォーの有名作家ウージェンヌ・ガヤール（Eugène GAILLARD/1862–1933）[14] の革製椅子 350 フラン，ジョルジュ・ド・フール（Geroges DE FEURE/1868–1943）[15] のソファー 2500 フランに比べるとかなり手頃だった [16]。取引先は主にモリス商会，リバティー，ジョン・ソリー・ヘンリー，クレモン・ヒートン（Clement Heaton），スミス・ベンソン（Smith Benson）などが記録されている。このようにビングの店ではいろいろな家具や工芸品を実際に目で見て，購入することが可能となっていた。

当時，フランスの工芸界ではジャポニスムの流行の後，「工芸美術」と「工業美術」の違いを巡って質の良い，しかも高価ではない工芸作品を作ることについてアール・ヌーヴォーの作り手自らも盛んにこの問題について疑問を持つようになっていた。工芸作品，特に室内装飾を購入しても，それを納める家はどうするのかという現実的問題も次第に表面化していた。それを打開する一つの方法としてヴェルヌイユは積極的に雑誌『アール・エ・デコラシオン』

図 3：ビングの店の様子 *Art et décoration* 1898.

図 4：ビングの店の様子 *Dekorative Kunst* 1898.

を通じてアーツ & クラフツを紹介していくわけだが，社会主義的，共産主義的な思想からの改良が目指されたのではなかったため，モリスが直ちに賞賛されるという風にはならず，むしろ思想的には，住居はそこに住む人間性をはぐくむと主張し，労働者が自ら効率よく働くためにも住みやすい住居が必要だと主張した建築家ウジェーンヌ・ヴィオレ＝ル＝デュク（Eugène VIOLLET-LE-DUC /1814–1879）[17] の考えが工芸家，建築家の間で支持される傾向にあった[18]。

このような中，1900 年の万博では，建築家と工芸家 6 人が集まり「ラール・ドン・トゥ」L'Art dans tout（全てのものに芸術を）と呼ばれるグループを結成し「現代の住まい」をテーマに展示を試みようとした。しかし，企画のみで終わり万博では実現されなかったものの，その計画はそのまま 1903 年，ボザール協会のサロン（Salon de la Société nationale des Beaux-Arts）で展示されることになった。その数ヶ月後には，同じメンバーが中心となって 1903 年の 7 月から 11 月までパリのグラン・バレ（Grand Palais）において「住まいと室内装飾工業の国際展示会」[19] として，ヨーロッパ各国の低価格住宅の展示会が開催された。図 5 はその時の展示会のポスターで，副題には「低価格住宅の役割」とある。図 6 はパヴィリオンの一つ，労働者のための家の展示の様子である。ここでもイギリスからは 20 件の展示があり，家賃がそれほど高くない快適なモデルハウスが紹介された。特にマンチェスターの市営住宅の魅力，ポート・サンライト（Port-Sunlight）やボーンビル（Bournville）などの牧歌的な工業村が紹介され注目を浴びたと記録されている[20]。

図 5（左）：Exposition de l'habitation ポスター
Bibliothèque nationale de France所蔵，1903.
図 6（下）：« Exposition de l'habitation » in *Revue de l'art ancien et moderne*, XIV, p.273, 1903.

この頃フランスでも，家具と建築を結びつけて設計を考えるということに取り組む機運が高まりつつあった。これはヴェルヌイユが雑誌『アール・エ・デコラシオン』の中で度々述べていたことで，まずは頂点に建築を据え，それに見合ったものとして中に入れる家具を構成し，小物，つまり衣食住にまつわる工芸を考えていくというものであった[21]。同時に『アー

ル・エ・デコラシオン』や『アール・デコラティフ』でも 1900 年以降から具体的にアーツ & クラフツの作品や活動がますます盛んに取り上げられるようになっている [22]。1905 年にはグラン・バレにおいて二回コンクールが開催されている。一つは『アール・エ・デコラシオン』主催の「低価格住宅のための家具コンコール」(Le concours de mobiliers pour habitation à bon marché)(図 7)で，入賞者は同じ年の別のコンクール「第二回家具の展示会」IIe Salon du mobilier で作品を展示するだけではなく，商品化のチャンスも与えられた。入賞基準は「安くて使いやすく，しかも美しい家具」というものだった [23]。低価格住宅のコンクールの詳細は『アール・エ・デコラシオン』の中でヴェルヌイユによって報告されているが，本文中「いったい低価格住宅というのは可能なのか」という疑問に対して，ヴェルヌイユはイギリスで現にそれが実現されているとして，同 1905 年レッチワース Letchworth で催されていた低価格のコテージ展示会のカタログ *The book of the cheap cottage exbition* を取り上げている。イギリスは特に低価格住宅の建設が進んでおり大いに参考にすべきであり，特に建築家のベイリー・スコット(Baillie SCOTT/1865-1945) [24] やヴォイジー(C. F. A. VOYSEY/1857-1941) [25] はこの分野の専門家であると述べている [26]。ヴェルヌイユは 2 年後 1907 年の『アール・エ・デコラシオン』の中で，特にスコットを紹介し，記事の中でスコットの書物「住居と庭」*House and gardens* も取り上げている。その評価は，合理的な部屋の配置，外観は簡素だが中が住みやすい点を絶賛している。「快適」という言葉はアーツ & クラフツ様式の建築を評価する時に何度も出てくるキーワードと言えよう。1909 年にはベルギーの建築家でアーツ & クラフツの様式を取り入れたジョルジュ・オベ(Georges HOBÉ /1854-1936) [27] も取り上げ(図 8)，アーツ & クラフツのベルギーへの拡がりとその住居の快適さを賞賛する内容の記事を書いている。続いて，1914-1919 年合併号の『アール・エ・デコラシオン』にはエドウィン・ラッチェンス(Edwin LUTYENS/1869-1944) [28] とウォルター・カーヴ(Walter CAVE/1863-1939) [29] によるアーツ & クラフツ様式の建築を紹介し，やはり外側には余計な装飾がなく，中は住みやすい作りになっていると評価している。

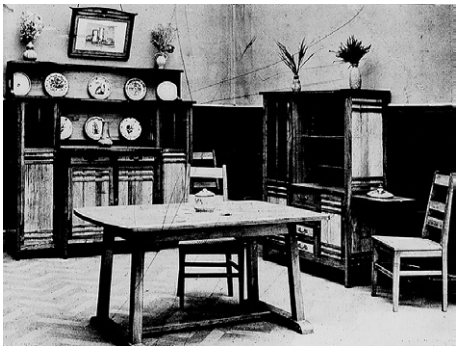
図 7：コンクール出品作 in *Art et décoration,* 1905.

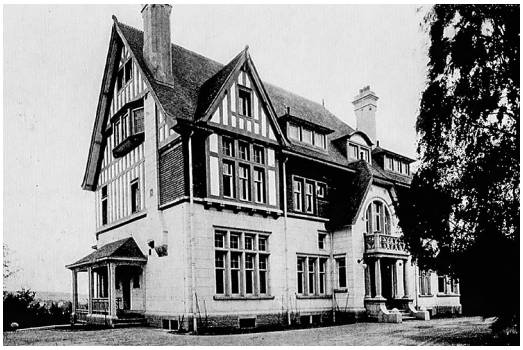
図 8：Georges HOBÉ, in *Art et décoration,* 1909.

さらに 1914 年 4 月から 10 月までの長期間，ルーブル美術館のパヴィリオン・マルサンではアーツ & クラフツの大展覧会が開催され一般にも大きく紹介される機会があった。その様子は約 30 ページにわたりヴェルヌイユが 1914 年『アール・エ・デコラシオン』の中で紹介している。内容を簡単にまとめると，刺繍，家具，印刷物，建築は優れているが，陶器，ステンドグラス，宝飾品はフランスの好みに合いにくいと指摘している[30]。また，ヴェルヌイユはアーツ & クラフツは近代工芸におけるルネサンスであると考え，その伝播の仕方はベルギーに最初に伝わった後，フランス，オランダに伝わり，ドイツ，オーストリアへ続いて影響したものと考えていることも合わせて述べている。

ヴェルヌイユは雑誌での紹介だけでは飽き足らず，自らの家もイギリスの田園風コテージのようにしたいと考えるに至り，1910 年には『アール・エ・デコラシオン』に「私の家」と題した論文を設計プラン付きで掲載し，フランスの建築家ルイ・セズィーユ（Louis SEZILLE/1881–1955）[31] に建築を依頼することになる。

2. ヴェルヌイユ設計の館

1910 年から 1914 年の 4 年間ヴェルヌイユが設計し住んだ館は，その後彼がスイスへ移住した時に売却され，現在は遺族とは別の個人宅として使われている（図 9）。屋根にあったアーツ & クラフツのシンボルの鳥，クジャクの風見鶏は新しい家の購入者によって縁起が悪いという理由から撤去され[32]，代わりに一般的な鶏の風見鶏に付け替えられた以外には大きな改修工事もされず，当時のまま保存されている。様式においてまさにアーツ & クラフツのコテージをモデルに 1910 年にフォンテーヌブロー近くの村に建てられた貴重な例と言える。建築にかかった費用は当時の 10 万フランと記されているから，当時の物価からすると安くはないが[33]，建築の質に対して費用はかなり抑えることができたと記録されている[34]。外観の模倣だけではなく，素材もその土地の物を使う，材料費を抑え低価格にこだわる，彫刻などの壁面装飾を一切省く，各部屋の間取りを昔風のブルジョワ向きの間取りにしないなど，それまでのフランス郊外の建築には見られない要素をもったものを完成させた。当時の図面を見ると，子供部屋と仕事部屋を離し，食堂と台所を隣り合わせるなど，使いやすさと動線を考え部屋の配置に注意が払われていることが分かるが，これは彼が紹介してきたアーツ & クラフツの建築図面と非常によく類似している。建築素材に関しては，壁は漆喰で，この地方で採れる硅石と石灰を混ぜた物でできており，赤い屋根は瓦で覆われ，その他の黒っぽい覆いの部分は鉛製の板である[35]。加えて内部には木製の梁をむきだしにするなど山小屋風の作りによってコテージの雰囲気を醸しだしている。庭については，建築物の約 40 倍の広大な敷地面積を取っており，まさしくスコットの著書「住居と庭」を思わせるような快適な空間を生

図 9：ヴェルヌイユの館，現在

図 10：当時の渡り廊下部分の写真（個人蔵）

み出しているのである。当時の写真にある渡り廊下には，手前と奥に花台，真ん中にソファーが置かれている（図 10）。花台は（図 4）左奥のベンソン & ビゴ社と同じ縦長タイプの花台である。他の当時の室内写真にもアーツ & クラフツ様式の家具が随所に見られ，アーツ & クラフツの室内装飾の影響も見受けることができる。また，建築家のセズィーユは建築と周囲の景観との調和を図った屋敷をパリの郊外にいくつも作っている。

3. ブリオー BLIAULT によるパリ女子電話交換手の寮

1900 年の「現代の住まい」の展示企画は，「ラール・ドン・トゥ」と呼ばれるグループが基になって始まったことは先ほど述べたが，この前身は，「ラ・ポワニエ」La poignée（握り拳の意）という工芸家のグループで，実はヴェルヌイユはそのメンバーの一人でもあった。「ラ・ポワニエ」は全く自由なグループで，時折パリで展示即売会なども催していたが [36]，それが後 1896 年に「レ・サンク」Les Cinq という五人のグループになり，翌 1897 年にメンバーが変わり，さらにメンバー以外の者も時々加わりながら「ラール・ドン・トゥ」という六人の建築工芸家のグループになったものである [37]。活動に関してはあまり詳しいことが分かっておらず，はっきりとリーダーがいたわけでもなく，いつの間にかグループは消え，最終的には個人個人の活動へと戻っていった。しかし 1900 年パリ万博のための展示企画で彼らが一致して目指したことは快適な低価格住宅の実現であった。フランスにおける労働者のための集合住宅については，19 世紀半ばに既にその萌芽を見ることができる。1849 年に初めてナポレオン・ボナパルトが財を投じて労働者のための集合住宅シテ・ナポレオン（Cité Napoleon）がパリに造られたがあまり好評ではなく，その兵舎か病院のような様相が強く批判された。その後 1889 年のパリ万博の際，フランス低価格住宅協会（la Société francaise des habitations à bon marché /SHBM）が結成され，協会の代表で政治家でもあったジュール・シーグフリード（Jules SIEGFRIED）が 1894 年にフランス初の社会住宅立法となるシーグフリード法を制定し，低価格住宅建設の資金調達，家賃の上限などの法律を定めた。1891

年にはソシエテ・フィラントロピック（la Société philanthropique）[38]，1905 年にはロスチャイルド財団（la Fondation Rothschild）[39] などの慈善団体の援助によって，20 世紀初頭から次第に労働者のための住宅建設にも力が入り，約半世紀にわたる改革によって低価格住宅建設のための民間企業や財団は少しずつ増加していった。しかしながら，こうした経済的観点からの動きとは異なる建築工芸家の観点からは大きな課題が残されたままであった。当時のアール・ヌーヴォー作家の代表的意見は，グラッセが 1897 年に装飾芸術中央連合で行った「アール・ヌーヴォー」についての演説に見ることができる。特に「民衆芸術とデモクラシー」という観点から，アール・ヌーヴォーの使命は日常生活で使う品物全てに美を施すことにあり，民衆のためと銘打って，特別に低価格の粗悪品を造ることだけは避けなければならないと述べた[40]。また美術批評家ロジェール・マルクス（Roger MARX/1859–1913）[41] も著述を集大成して 1913 年「社会芸術」*Art Social* という書物を出版するが，そこでもやはり民衆のための芸術について言及し，上流階級のもつあらゆる芸術は全ての民の物であって，それを共有し生かすことにより産業の発展延いては一国の経済発展につながると主張した。これら美術工芸界のリーダーの思想を受けてグラッセの弟子であるヴェルヌイユや「ラール・ドン・トゥ」のメンバーたちが，一般大衆の日常生活に美を取り入れるような製作に重きを置くことを目指した。加えて，美的なこと以上に，建築においては費用，衛生面の改善など用途と必要性にも重きが置かれた。これはデザインを重視しながらも近代生活が進むことによる現実的な問題，使いやすいか，快適かどうかという問題への並行した探索でもあったと言える。このような折に，19 世紀末期から次第に入ってきたアーツ & クラフツを参照し，労働者のための住まいや家具作りに取り入れようとしたものと考えられる。そのような建築の例はパリとその周辺だけでもいくつか見ることができる。少し例をあげると，「ラール・ドン・トゥ」のメンバーの一人である建築家シャルル・プリュメ（Charles PLUMET/1861–1928）[42] によるパリ 16 区のヴィクトル・ユーゴ通り 50 番地に現存する建物がそれである。一見して簡素ながらも洗練されたアール・ヌーヴォー様式の佇まいであるが，当時最高の衛生設備，電気設備を備え快適さにこだわった建築であった。『ザ・ステューディオ』のフランス人通信記者ムレがサン・クルー St. Cloud に自ら設計して建てた家もまた，外部の装飾を一切省いた簡素な一軒家で，アーツ & クラフツの要素をうまく取り入れ実践した例と言えよう[43]。

同様の目的意識を持って造られた建築例として，本稿で二つ目に取り上げるのは 1905 年建築家ブリオー（BLIAULT）による女子電話交換手寮である。いわゆる当時の公務員住宅で，建物はパリ 7 区リール通り 41 番地に現存している（図 11）。彼の名前は資料によってはウジェーンヌ（Eugène）と記されたり，エミール（Emile）と記されたりしている。当時の建築雑誌や『アール・エ・デコラシオン』ではブリオー氏（M.BLIAULT）としか表記がない

が，エミール・ブリオーは 1905 年グラン・バレで開催された低価格住宅の展示会において「ラール・ドン・トゥ」のメンバーの工芸家フェリクス・オベール（Félix AUBERT/1866–1940）[44] と組んで労働者向けの建築を提案している [45]。ブリオーは「ラール・ドン・トゥ」のメンバーとも交流があるだけではない。ヴェルヌイユが今まで紹介してきたアーツ & クラフツに続く形で，1907 年の『アール・エ・デコラシオン』でこの寮を取り上げている。この建築が特に評価されているのは，内部の装飾，構成においてエレガンスを保ちながらも低価格で実現され，それが地方から出稼ぎに来た若い女子労働者のために作られたという点である。フランスにおける質の良い低価格住宅は『アール・エ・デコラシオン』の中でいくつも紹介されているが，どれも個人住宅，それも中流階級以上に向けたものと言わざるを得ない。この寮は低価格住宅の建設において，初めて理論が実践として完成した例として取り上げている。建設に当たり，ブリオーは安価な素材を用いながら費用を抑えて，美しくかつ快適な寮を作る使命を受けていた [46]。様式としてはアール・ヌーヴォーと言えるが，無駄な装飾を取り除いて製作しなければならなかったため，結果として内装などにアール・デコに近い特徴もあり，様式転換の過渡期の例としても見ることができる。

現在も 250㎡の一階部分は三つ星レストラン（図 13）として使われ，二階より上は人が住んでいる。当時の写真と一階部分の美しいステンドグラス（図 14）や明るいテラスの醸し出す雰囲気から，かなり快適な様子が伝わってくる。建物のファサードは石とレンガの作りとなっているが，パリで初めての 7 階建コンクリート建築として知られる。正面の見た目は簡素だが，中の仕上がりは高級感が漂う作りになっている。地上階のみは石作り，一番上のバルコニーの屋根は木製。当時は玄関を入るとすぐコートかけと洗面所があり，このような衛生的設備はブリオー自身がワシントンの女子専用ホテル，マルタ Martha[47] やイギリスの寮を見る機会があり，それを参考にしたと記録されている [48]。個室は 111 室あり，各部屋は 12㎡の小さなものだがよく採光が考えられている（図 15）。家具付き，床はリノリウム製，各階に当時としては珍しい温水手洗い，シャワールームとトイレが 3 つずつ，汚れたシーツ専用の小さなエレベーター（昇降機）も設置されていた。一階の食堂にはステンドグラスがはめられ，図書室，中庭，ベランダもあり，各階の踊り場には版画，各部屋には壁飾り，壁紙なども明るく飾られた。特に各部屋の壁と天井との境のフリーズ飾りは費用を抑えるために型紙 pochoir を使い模様を施しているが，型紙は 3 種類の異なる模様を用意しバリエーションを持たせている。照明に使われた素材も銅製で費用を抑えているが，決して見劣りしない物となっている。土地代も含め総額 60 万フランで完成，期待に添った仕上がりになったと当時は評価を受け，いくつかの建築雑誌や『アール・エ・デコラシオン』で大きく取り上げられた。このような近代的設備を備えた美しい寮に食事付きで家賃 18–30 フランで入ることが

できたのは，当時としては画期的なことであったからである。

図 11：旧女子電話交換手寮の建物　現在

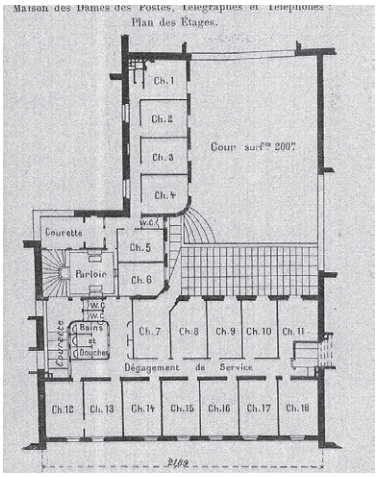

図 12：当時の寮内部　間取り *Art et décoration,* 1907.

図 13：レストランとなっている一階部分　現在

図 14：一階天井付近のステンドグラス　現在

図 15：当時の寮内部の様子 *Art et décoration,* 1907.

おわりに

以上のようにフランスでは，1894 年に雑誌『ラ・ルヴュー・オンシクロペディー』でアーツ & クラフツが大きく取り上げられてから，工芸家の間に色々な刺激を与えることになった。『ザ・ステューディオ』を参考に 1898 年美術工芸雑誌『アール・エ・デコラシオン』や『アール・デコラティフ』が創刊され，瞬く間に当時のフランスの工芸家にとって重要な情報源となった。同じ頃ビングの店では実際にアーツ & クラフツの家具も販売されるようになっていた。ヴェルヌイユは雑誌『アール・エ・デコラシオン』で頻繁にアーツ & クラフツを取り上げ紹介し，フランスの工芸家たちに多くの情報を伝えることに貢献したが，その伝播は「ラール・ドン・トゥ」のような新しい意識を持った建築家と工芸家のグループを生み出し，彼らの目的は快適な住まいをつくることに置かれた。グループに所属していない建築家や工芸家の間でも「住みよさ」「快適な空間」が重要視されるようになり，社会問題として労働者の住まいを語るときにアーツ & クラフツの建築や室内家具は必ずと言っていいほど参考にされた。閉塞状態を迎え始めたアール・ヌーヴォーの打開策の一つとして，「ラール・ドン・トゥ」のメンバーをはじめ工芸家や建築家が低価格，大衆化を目指したのであるが，フランスにはないアングロサクソンの合理精神をアーツ & クラフツから学ぶ意義は大きかったのではないかと考えられる。様式としてはヴェルヌイユの館のようにアーツ & クラフツのコテージのようなもの（これは別の形で 20 世紀初頭のパリ郊外の屋敷建築へと発展していくものと考えられる），もう一つは，外観からはその影響が見えないものの低価格と合理性を追求する結果，簡素ですっきりしたスタイルをもつものの二つに分けられる。後者はその後，アール・デコの住宅スタイルへとつながるものと考えられるが，「ラール・ドン・トゥ」の 6 人の重要メンバーの一人，シャルル・プリュメが 1925 年のアール・デコ博覧会の代表建築家に任命され，博覧会の指揮を取ったことも忘れてはならない。1914 年から 1918 年まで，アール・ヌーヴォーからアール・デコへの転換期はちょうど第一次世界大戦の時期に相当しており，戦後すぐは建築資材が不足する時期であり，低価格住宅の建築は必須となっていく。このような環境下の様式変化は決してスタイルの突然変化ではなく，改善，改良の試行錯誤を経て至った必然的なものに違いない。そこにアーツ & クラフツは触媒のように効果的に作用したものと考えていいだろう。

注

1 ヴェルヌイユについては拙稿「アール・ヌーヴォーのデザイナー，M.P. ヴェルヌイユによる動物のデザイン」『デザイン理論』57 号，2010，pp.61–73 及び単行本『アール・ヌーヴォーのデザイナー，M.P. ヴェルヌイユと日本』クレオ，2013 を参照。

2 フランス象徴主義の詩人で Henri CAZALIS の別名。アール・ヌーヴォーを支持し，詩のいくつ

かはサン・サーンスの音楽にも用いられている。

3 Jean LAHOR : « M.William Morris et l'Art décoratif en Angleterre », in *La revue encyclopédie*, 1894.

4 Camille MAUCLAIR : « La réforme de l'art décoratif en France » in *La nouvelle revue*, No.98, fevrier, 1896, pp.724-726.

5 フランス象徴派の詩人マラルメの弟子，詩人，文学美術批評家。

6 Camille MAUCLAIR : « Soyons Français », in *Revue des arts décoratif,* 1897, p.3.

7 フランスマルセイユ出身の小説家，詩人，美術批評家。『ステューディオ』や『アール・エ・デコラシオン』に多数の記事を書いた。

8 日本美術に強い関心を持ち日本風の木版画を作成，アール・ヌーヴォーの装飾家。

9 ケルン生まれのドイツ人デザイナー。ニューヨークのティファニー，カナダなどで活動した後，1898 年ビングの店で家具や鏡の枠，革製品などのデザイナーとなる。ビングの店による 1900 年のパリ万博出品作品の多くを手がけた。

10 ロンドンにあった家具の工房。中流階級向けの質の良い家具製作を目指した。Voysey や William BENSON がデザインを担当した。

11 木製部分は William BENSON，台の陶器の部分は Alexandre BIGOT によるもの。パリ装飾美術館所蔵の Bing の記録 Album de références に写真が残っている。

12 イギリス・ウェールズの芸術家。油絵，水彩画，版画，彫刻，イラスト，家具・食器・カーペット・ステンドグラス等のデザイン，建物や内装の設計なども手がけた。1895 年ビングのギャラリーの外観装飾の制作を手がけている。

13 Bibliothèque des Arts décoratifs, Paris inv. no LL53.

14 パリ生まれフランス人の家具デザイナー，建築家 Georges DE FEURE，Édouard COLONNA とともに 1900 年のパリ万博のアール・ヌーヴォーのパヴィリオンの正面飾りの製作を行っている。

15 パリ生まれのオランダ人芸術家。1900 年のパリ万博のアール・ヌーヴォーのパヴィリオンの正面飾りの製作を行っている。主にビングの店のためにアール・ヌーヴォー様式の工芸品や家具を作った。

16 *Les origines de l'art nouveau, la maison Bing*, Musée des arts décoratifs, Paris, 2006, p.162.

17 19 世紀フランスの建築家，フランス国内の数々の城や教会などの修復を手がけたことで知られる。著作もあり，後のデザイナーや建築家に大きな影響を与えた。

18 VIOLLET-LE-DUC : *Entretiens sur l'architecture*, Paris, 1863-1872, pp.304-305. L'Art dans tout メンバーの一人である建築家シャルル・プリュメはヴィオレ＝ル＝デュクの考えを継承し，建築というのは使う人の必要性によって決まると考えた。

19 1ère Exposition international de l'habitation, des industries du bâtiment, et des travaux d'art

20 Henri HAVARD : « L'exposition de l'habitation » in *Revue de l'art ancien et moderne*, XIV,No 79, 1903, p.274.

21 M.P-VERNEUIL: « L'Art décoratif à la Société Nationale » in *Art et décoration*, 1903, p.23.

22 1902 年にはヴェルヌイユはイタリアのトリノ万博を視察し，その様子を見て各国のモダンスタイルを紹介している。その際，アーツ & クラフツの影響をベルギー，オランダが受けていること，ドイツとオーストリアに合理的で新しい様式が生まれつつあることを感じ取っている。イギリスについては染織，壁紙などは優れているが 10 年前くらい進歩が見られないと述べている。一方，スコットランドの民族的な独自性，特に Mackintosh に注目している。

23 M.P-VERNEUIL « Mobiliers à bon marché »“ Le but recherché par le Comité est la création

de types de mobiliers artistiques en même temps que simples et peu coûteux, appropriés aux besoins et aux ressources des travailleurs, en tenant compte des lois de l'hygiène et des progrès réalisé dans l'habitation moderne…" in *Art et décoration*, octobre 1905, p.116.

24 アーツ & クラフツの代表的な建築家の一人。簡素なスタイルに特徴がある。吉村典子「1900 年の「無地」―ベイリー・スコットの住宅論と実作例の考察」『デザイン理論』59 号，pp.90–91 を参照。

25 アーツ & クラフツの代表的なデザイナーの一人。建築，染織，家具など幅広く活躍，工業デザインの重要性を説いたことでも知られる。

26 同掲 21，本文中には Port-Sunlight や Bourneville も例にあげ，これらを元にコピーではなく良いところを取り入れるべきだと示唆している。*Art et décoration*, octobre 1905, p.132.

27 ブリュッセル生まれのベルギー人建築家。ベルギーのナミュールにあるカジノの建築でも知られる。

28 イギリスの建築家。アーツ & クラフツから特にネオ・ジョージアン様式と呼ばれるものまで造っている。

29 イギリスの建築家。当初はアーツ & クラフツ様式であったが次第に新古典主義に至る。1913 年ロンドン，ヘイマーケットに建てられたバーバリーの建物はその例。

30 ヴェルヌイユの個人的な意見と言えるが，陶器については日本の陶器のようなカリエス Carriès の作品を例にフランスの物は地味で渋く，イギリスの物は派手なものが多いと印象を述べている。ステンドグラスについてはフランスの物よりも鉛の線の部分が太すぎて繊細さにかけること，宝飾品についても同様に太くて大きい作品のため女性的ではないとの印象を述べている。ラリックやヴェヴェールのような卓越した宝飾デザイナーを輩出したフランスでは，好みや美意識はイギリスとかなり違い，より繊細な物が好まれたことが分かる。

31 フランスの建築家，自らも雑誌 *La vie à la campagne* に建築に関する記事を連載するなど郊外に田園風の建築を広めた。

32 現在の居住者は二代目に当たり，その父親の代にクジャクの飾りを撤去し廃棄したと筆者が直接聞いた。

33 統計によると 1911 年のフランスの職工一ヶ月の賃金は約 24 フラン，10 万フランの家を購入するには 347 年間の給料に相当し，低価格とはいえブルジョワでなければ到底手の届かないものである。*Salaires et coût de l'existence : à diverses époques, jusqu' en 1910* / Ministère du travail et de la prévoyance sociale, Statistique générale de la France — 1911.

34 M.P- VERNEUIL: « Ma maison » in *Art et décoration*, 1910, XXVIII, p.68.

35 同掲 32, p.74.

36 Gabriel MOUREY : « Exposition de " la Poignée "» in *Art et décoration*, 1903, XIV, p.68.

37 Rossela FROISSART- PEZONE : *L'art dans tout,* Les arts décoratifs en France et l'utopie d'un Art nouveau, CNRS Edition, 2004.

38 フランスに 1780 年に創立されて以来，現在も続いている慈善団体。

39 フランスに 1904 年に創立された慈善団体。1907 年から 1919 年にかけてパリにいくつかの集合住宅を完成させた。

40 E. GRASSET : L'art nouveau : conférence faite à l'Union centrale des Arts décoratifs le 11 avril 1897, in *Revue des arts décoratif,* juin 1897, p.21.

41 « Quand l'art se mêle intimement à la vie unanime, la désignation « d'art social » seule peut lui convenir; on ne saurait restreindre à une classe le privilège de ses inventions ; il appartient à

tous, sans distinction de rang ni de fortune ; c'est l'art du foyer et de la cité-jardin, l'art du château et de l'école, l'art du bijou précieux et de la broderie paysanne ; c'est aussi l'art du sol, de la race et de la nature ; l'importance s'en atteste par son action sur le développement des industries et sur la prospérité matérielle du pays — si bien que ses destinées se trouvent intéresser à la fois l'esthétique, la sociologie et l'économie politique. » in *L'Art Social*, Paris, Eug. Fasquelle, 1913.

42 フランスの建築家。パリの地下鉄の駅や公共建築，集合住宅，店舗の建築を手がけた。

43 Charles PLUMET: « Une maison de campagne » in *Art et décoration*, 1902, p.199.

44 フランス，ラングリューヌ＝シュル＝メール（カルヴァドス県）出身の画家，工芸家，アール・ヌーヴォー様式のレースや染織，壁の装飾などを手がけた。

45 同掲 36，p.146.

46 当時，電話交換手は女性の社会進出にともなって新しく生まれた職業であったが，多くは地方出身で住環境は整っていなかった。当時の国務長官がそれを取り上げパリに寮を作る構想が立てられた。« La maison des dames des postes », in *Art et décoration*, 1907, XXI, p.6.

47 Robert Williams GIBSON によるネオ・ルネッサンス建築の Martha Washington Hotel New York は現在 Redbury New York Hotel として存在している。

48 « La maison des dames des postes, télégraphes et téléphones », in *La construction moderne*, 12 janvier 1907, p.173.

The Influence of the "Arts and Crafts" Style on French Art Nouveau Style Architecture

HIROSE, Midori

At the turn of the 20th century, the English "Arts and crafts" movement diffused in France through different channels. For example, around 1896, in Paris, the art shop "S. Bing" offered furniture and works of art in this style. Moreover, the French artist Maurice Pillard-Verneuil introduced this style in many articles in the French art magazine *"Art et décoration"*. These two channels were the most efficient. There was also an "Arts and craft" exhibition during 6 months in Louvre museum in 1914, and, of course, direct contacts between French and English artists.

Maurice Pillard-Verneuil is a French artist, and one of the disciples of Eugène Grasset. At the end of 19th century, he was instrumental in promoting the French "Art Nouveau" style, writing 23 books and 128 articles in the journal "*Art et Décoration"* on this subject. He also promoted the "Arts and crafts" style in the same journal. From one of his articles in this journal, entitled "My house", it is known that he had a house built in this style in Paris suburb and lived in it from 1910 to 1914. After thorough research, I found that this house already exists. I could visit it and since it has kept most of its initial appearance, I present in this article several "Arts and crafts" features it possesses.

Another typical architectural example of this time is the « House of women employees of Post office » that was built in Paris by the architect Briault in 1905. It still exists as a restaurant, and I could visit it. Its decorative style, with stained glass and typical stairs, is more "Art Nouveau" than "Arts and crafts". However, one can feel the influence of William Morris in the layout of rooms and in the goal of the building itself: to bring comfortable living conditions to middle class workers.

These two buildings illustrate well how French architects began to consider inhabitants' comfort in their architectural and interior designs.